

三合屯で現地慰霊祭を行った。現地に残って生存されている十二人の同胞も探して涙の対面激励をされ、その後残留孤児のお世話もされた。また里帰り実現のため、身よりのない方のためには、里帰りに当って率先して親代りもされた。

いま、この瀧川さんのお姿は、まことに神のように神々しくうつるのである。数年前、この人生体験を市内校長会、及び生涯学習シンポジウムに於て語って頂いたが、多くの市民に大きな感動を呼びおこした。

瀧川辰雄さんはこのような方である。

(新城市教育長 中西 光夫)

「父さんはどうとう帰って来ませんでした」

福岡県 江 頭 ふみ子

大正七年二月十一日、福岡県嘉穂郡桂川町三千百九

十番地に於て出生いたしました。

私は祖父に当る佐々木鶴吉の養女となることが母と父との結婚をする時から、決まっていたそうです。お産を済ませた母は直ぐ満州へ帰ることになっていたのですが、当時世界的に大流行をきたしていたスペイン風にかかり、産後引きつづき床についてしまい、祖母は私を抱えて、あちらこちらと貰い乳に回ったと、大きくなった時まで、苦勞話をしていました。母は産後のこととて非常に重体が続き、何年も床についたきりの状態だったそうです。それ故離婚をすることになったと祖母から聞いております。二度目の父は矢張り満州撫順炭鉱に勤務する実直そのものと云った人でした。

昭和二年母、祖母、私を迎えに来てくれた、二人目の父を見たのはその時、私の五歳の時でした。

母のお腹の日以来五年振りに帰って来た撫順は何とはなしに親しみのある所に感じられたような思いがいたします。それ以来私は可もなく不可もなく、祖母の愛情に育まれ、撫順東郷幼稚園、撫順永安尋常高等小

学校、撫順高等女学校と終えることが出来、昭和九年十一月二十四日憧れの人、満州国協和会撫順県本部事務長、野島達雄（亡）と結婚することが出来ました。

昭和十一年長男を難産の末に産み落しましたのは二度中国の武漢三鎮陥落の日でございました。二年置いて、昭和十三年に次男達也を。中国との戦争をしながらも、私達は以前とは変らぬ明け暮れでした。そう思っていたのは私ばかりではなかったと思います。私が嫁にまいりました以前から、野島の家の雑用から、炊事に至るまでを全てまかせている満人の老頭ろうとう児が、外に出て行つては、世間のニュースを耳にして来て、得意気に話すのを聞いては、世間がだん／＼さわがしくなつて来たくらいの呑気さでおりました。がある日突然協和会市本部の事務局長伊本様が、入管との話を伺つてまいりました。伊本様の御宅は撫順市の西のはずれの住宅街にありななかお目にかかる時が少なく、話を伺うとすぐに洋車を走らせました。奥様は私よりも、年長の方でいらして、しっかりと落ちついておいでになるのが羨ましくなりました。

私共の公館は、協和会県本部に隣接した官舎に六軒の職員の家族と仲良くお付き合ひをしており、その内四人の方は皆軍籍のない方ばかりで、軍籍のない伊本様に赤紙が来たことで、一同おどろきあわててしまったものでした。その中、門外に住む住民の中にも追いかく／＼と赤紙が配達され、重苦しい空気が流れ始めました。

六軒の家族にも次々と召集令状が配達され、とう／＼最後に残った七人目の主人にも令状がまいりました。それは昭和十八年の雪解けと同時に柳の芽が、そ／＼と顔を出す四月の頃でございました。出発前の忙しさにくらべ、主人が玄闈で「お腹の子を大事に頼む二人の子供と母もネ」「行くよ」と言つて私の顔をじつと笑顔で見つめ征つた主人の面影は、時にはうすばやけてしまう日もあるのです。

一週間が過ぎ十日たつても、主人からは何の便りもありませんでした。月末になり、財布のかるさが心細くなり始めると、一人寄り、二人寄りしては、主人の安否、懐ろの話になつてしまいます。新京の協和会本

部よりの連絡が何よりの頼りなのですが、一向に何の便りもなく、妻達だけの協和会になってしまい、果てには、満人職員、朝鮮人職員までが一人減り二人減りのありさまでした。

ある日突然、市本部の延沢登代夫人がふるしき包みを持って急いで、おいでになりました。奥様、大変、ご主人から荷物ごと、涙声で言われ大急ぎで荷物を開けて見ますと、出征のときに着ていった、協和服に帽子、それにゲートルが出てきましたが、検閲済みの荷物からは紙切一枚に「元気で軍務に務めている、家にいる時よりは少し太ったようだ」「子供達を頼む」只それだけの走り書きでした。

満州の九月はもう寒く、酷寒の十二月はもう目の前に迫っております。今まで山積みになっていた石炭の山が小さくなり、白系のロシア人職員のブレーニン親子、万年五十三歳を唱える満人の老頭児は、私共にとつてはかけ替えのない家族同様の人達でございました。ブレーニン、老頭児は官舎の裏に小さな煉瓦作りの家にストーブを炊き、私共七軒の家は横丁字型の家

で、大きな地下室でボイラーを炊き、毎日春のような冬を送っておりますので、今になって初めて石炭の有難さ、ブレーニン、老頭児の有難さを知りました。

二人から「来年までの石炭をどうするか、給料はどうするか、太太困った」と言われ始めたのにはほと／＼困り果て、同地区の世話人会の区長に相談に参りましたが「どこも同じ事情で困っている所なので」もうしばらく様子を見てほしいとの返事……手の打ちようのない時代に入ったことを知らされただけでした。

十九年の新春はお互い寂しい正月でしたが、ブレーニン、老頭児が支那町で買物をして、ささやかながら、初春を祝う屠蘇も見つけて来てくれました。七人の妻達は二人の異国の老人に感謝をしながら久し振りにうき／＼と膳を囲むことが出来ました。正月も過ぎた日ニコニコした顔で老頭児が小さな包みと封筒を、頭の上にかざして入って来ながら、「早く太太、開けて」と持つて来たのは、主人からと直ぐにわかりました。私が荷物の方に手をやると、「不行不行、これ早く手紙を読め」と申します。「これ駄目よ」と向こうに行

くように手を振ると不服そうな目で見返りながら、部屋を出て行った老頭児の顔が、目の裏に焼き付いたように思い出されます。荷物はゲートルとタオルにしっかりと巻かれた「備前長船」の名刀でした。

送り来し夫の遺品のゲートルに

汗の匂いの浸みてかなしき

毎日がどうして明けくれたか、只待ち続けたことばかりが思い出されます。毎日の買い出しに、炊事の子供達の相手と、ブレーニンと、老頭児の日課とは一つも変ってはおりませんのに、主のいない家の中は秋風の吹きぬけたような寂しさでした。明けて昭和二十年の元旦も、いつもの通り玄関には大きな四斗樽の松竹梅をすえつけました。きっと主人が喜んでくれると思っただけです。年賀の客の来訪は私にとって何よりの喜びでした。子供達も、嬉々として楽しそうに、はねまわるのが母を喜ばせることだと常に考えてまいりました。五月一日春立ちぬ、しだれ柳の枝々に、可愛いみどりの芽が出始めました。

九月一日待望の女兒を出産いたしました。父さんの

顔も声も、何一つ知らぬ、可愛い女の子でした。名前は父さんが付けて置いて下すった「順子」撫順生れの「順子」です。御七夜の七日目に、誕生を祝って、官舎の奥様達と撫順神社に、ブレーニンの車でまいりました。途中参道で出会った、苦力にいきなり声をかけられました。「日本人負けるよ」「知ってるか」「早く日本帰るいいよ」代わる代わる声をかけられ、冷水を掛けられたような気持ちで、ブレーニンを急がせて帰ってまいりました。帰宅して、老頭児に話しますと、「心配ないよ、我的いるよ、ブレーニンいるよ」と慰めてくれます。老頭児は、長男を我が子のように守ってくれていましたので、長男の頭をなでながら「大丈夫〜」と一人うなずいては自分自身を慰めていたようです。老頭児は世間の噂も、日本人が負けること等も早くから、わかっていたような気がいたします。私達に心配させまいと、そう思っていたに違いありません。世界のこと、世間のことは主人まかせで、老頭児まかせ、主人が買って来てくれる大好きだった、宮本百合子、吉屋信子、等々読みながら一日を送った日が、

「うそ」のような気がしてなりません。

突然昭和二十年八月十四日正午「皆さん只今より重大ニュースを発表致します」「明日正午重大発表が行われます」「聞き落しのないよう」とラジオから叫ばれた声は悲痛な叫びに聞き取れました。翌朝は早くから、そわ／＼しながら官舎の奥様達に声をかけ、私宅に集まって頂き、何事かと緊張の面持で、正午の時報を待ちました。正午前からラジオの調子が急に雑音がひどく、ますます不安がつるのでした。それは、まさしく昭和二十年八月十五日正午です。雑音の合間をぬって、何かを朗読するようになかすれた声時々聞こえてき、何が何やら解らぬ間に終ってしまいました。門の外でがや／＼と人声を通り過ぎて行きます。老頭兎に様子を見にやろうと呼びますが、もう、とつこの昔に彌次馬さんで家の中には見えません。どこからか、ニュースを拾って来るからと、姑ばばを慰めてはいるものの、慌てているのは私だったかも知れませんでした。終戦詔勅後のことは、今思えば出そうとしても、筋道立てて話せと言われても覚えておりません。只、頭に

焼きついている言葉は「日本人の生命財産は必ず守ります」どこから流れて来たのかラジオの声は脳裏にきざみ込まれております。それから隣組を通じて、色々流れ来て来たことは、もう自分達の目の前まで死、夢にも考えたことのなかった死が迫って来ていることでした。

まず、青酸加里のふくまれた角砂糖、一人一個あてが、配られてきました。隣組からドラの合図でまず子供、老人の順に吞ませること、次、戦える者は男女を問わず、武器なる物を用意しいつでも飛び出せる用意をすること、等々：咄嗟に私の頭にひらめいたのは、独立守備隊のことでした。どうしても、父さんの無事がわかるまでは姑と三人の子供は守らねば、どんなことになろうと絶対に死ぬまい、守って見せる。隣組の合図がある前に、夜中老頭兎に順子を背負わせ姑と二人の息子を連れ出す計画を、ひそかに立てておりました。二日間夜も寝れず緊張の日夜が続きましたが、隣組を通じての連絡はありませんでした。あの時庭の片隅に人目をしので埋めて来た「青酸加里」はどうな

っているでしょうか。油紙にしつかりと包んだ毒薬は、もう解けてなくなっているでしょうか。

「日本敗れたり」でも私は嬉しかった。嬉しくて嬉しくて順子を抱きしめて泣きました。両脇に二人の息子を引き寄せ、「父さんが帰って来るのよ、本当よ本当よ」ぼろ／＼と泣きました。それからの私達は夜のふけるのも忘れて二、三人と集まっては主人達の軍靴の音を待ち侘びました。夜が来ると子供達を寝かせては耳を澄せる夜が、以前にも増してつづきます。

その中に今日はどこの誰が帰って来られた。昨日は誰と誰かがと、ぞくぞくお帰りになった話ばかり耳に入つて来ます。だんだん不安がつつて来ます。元来呑気物の方ですが、いつかいらいらと子供達に当たり散らすようになり、子供達は私の方ばかり気にしては、泣き声を立てるようになってしまいました。

終戦と同時に老頭兎は、門外に出ては買い出し、情報集めと大忙しの毎日を送っていましたが、さすがに商売上手の満人です。官舎や近所では適当に商いをしてきたようで、帰りには必ず長男にお土産がありま

したが下二人には私が催促をすると、首をすくめて渡しておりました。そのようなある日、いつものように入って来た老頭兎の話によると、「二、三日中に大鼻クビレ子（ソ連人）が来る、皆で早く避難するように」と申しますので皆さん共相談をして、ともかく叔母の住むセメント会社の空部屋を相談して借り受け、様子を見ることにし、寒さと飢えをしのぐ用意だけを大急ぎでまとめ、ブレーニンに県本部のトラックに積み込んで貰い移動いたしました。叔母のはからいで、煮炊きは共同炊事ということで、すんなりと片付きましたが、私は、主人が責任ある県本部を留守にするわけには参りませんので、ブレーニン、老頭兎と三人で家に帰りました。

そして、その翌日の日暮れと同時に支那町の方から、撫順の市内東南の方を目がけて、何千と云う暴徒の群れがソ連兵一味が先頭になって、なだれ込んでまいりました。ドラを叩き鐘を打ち、長い棒で窓硝子を叩き割り、家の中に躍り込んで天井と云わず、壁と云わず、畳と云わず引きはがしては持つて行く、そのすさ

まじさ。家財道具はこわされ、持ち逃げされ、天井裏からのぞき見をする、その恐ろしさは口や筆にて表わせるものではありません。本当に昔夢に見た物語りです。今ここにこうして書きながら、後から老頭児がのぞき見をしているような錯覚を覚えます。万年五十三歳と胸を張っていた老頭児は、天国で幾歳になっただるか一人涙しながら、会いたくて会いたくてならない人の中の一人です。小柄で猿のような顔の可愛い老人でした。

暴動の終った後から長かった風の冬の夜も明けて、あたりは不気味な様相を見せておりました。二、三日様子を見た結果、官舎の方へ帰って、皆いちように立ちすくんでしまいました。西九条通り四十五番地周囲は満人の家が多く、殆どの家が商売人で仲良く毎日交際をしておりましたが、少し東北の方に向かって行くと、満人達で賑わう市場や、日、満人の色町の方は、ソ連兵があふれるように占領しているとの情報で姑娘(コウヤウ)を見ると、ソ連兵に連れて行かれて帰されぬので、婦女子は絶対外に出ぬようにとの回覧がまわって来まし

た。

その頃から、誰言うもなく婦女子は、丸坊主になって、男装をしようという気配が日本人全体に行き渡ってしまいました。私共の官舎でも、そのように言いながら、髪まで切つて丸坊主とはなかなか出来ませんでした。いざ実行しようかという日の午後、ソ連兵が県本部にまいりました。が、一人は将校で礼儀も正しく、本部の書棚につかつかと寄つて行き、一冊を手にとつて見ていましたが、そのまま手に持つて出口まで来て、今日の五時までに一人婦人を差し出すようにと、否も応も言えぬ、きびしい口調に、私は返答も出来ず困り果てましたが、皆と相談の結果、又、髪を切つて身一つで逃げまじようと一たんは決めましたが、もう時間があります。どうしようと泣き出す婦人も出る始末がありません。どうしようと立ち上り「私が参ります」「私は皆さんも御存知と思いますが色町の女でした。同郷のよしみで、Hに助けてもらい、又皆さんからは後指一つさされずに仲良くして頂きました。その御礼をする時が来ました。日本人の恥と思う

時が来たらいつでもこれがあります」と、終戦詔勅の翌日に配られた青酸加里の袋を出されました。皆一同思わず泣き伏してしまいました。只只、頭をさげるのみでございました。その夕方ソ連兵の車に乗って行かれた。その後H夫人の姿を誰一人見た人はなく、今はどこでどうしておられるか探す術もなく年老いてしまいました。どれほどの数の婦女子が悲惨な目に会い、行方知れずになり、花の命を捨てねばならなかったかと思ふ時、ただ涙するだけでいいのでしょうか。又男性も同じです。

北満の地において武装解除をされた、元日本陸軍の兵士も哀れです。よれ／＼の軍服に身を包んだ一団が県本部の門内になだれ込んで来られ、何事と皆飛び出してみると、垢にそまつたきたない肩かばんによごれた毛布等々。一人の兵士が、一足前に出られ、「自分は、北満第〇〇〇隊の者ですが、現地において武装解除され、徒歩にてここまで参りました上は、何としても故郷に帰る覚悟です。一夜の宿をお貸しして頂きたく参りました」聞いている中に主人もこのよ

うにしてきつと帰って来てくれると思い、官舎全部で風呂を炊き、老頭児の持ち運んでくれるモチキビや白米、麦と色々たまぜ合せの穀物でかゆを炊き、食べて頂きました。食事の後、円座を作って話にふけりましたが、一人の方が我々は皆：陛下の御心を汲んで、ならぬ堪忍をしてここまで生き延びて来ましたが恥かしいことです」と涙を流されたのが印象に残っております。武装解除の兵士と、相前後して、北鮮、満州の北部からの難民の人々が、やせおとろえた母の背中で、ぐったり後に首を垂れ、泣きつかれて眠っている姿が、行列におくれながら歩いて行くのを、涙ながらに見送る外は術てのない私共でした。心の中では明日は我が身かとの思いでした。

日本人居留民会という組織が、満鉄、撫順市民側の会が出来、難民救済に立ち上って下さることとなりました。満鉄側はあらゆる建造物に難民を収容、市側も又満鉄側と相談をしながら、映画館、公民館、劇場、クラブ等々に難民収容に力を尽くす手段が出来上りました。満鉄社宅側は殆どの社宅はなんの被害も受けず



済んでおりますので、大勢の御婦人が手分けして炊事、雑用と民会に奉仕されました。難民の方達の食事は一日三回湯のみ碗一杯、それもだんだんと日が立つにつれ難民の数は増すばかりで、後では一日二杯、一杯と食事の量も減るばかりで、奉仕の満婦会も市内の我々も、自分達家族の方も、あぶなくなって来るばかりでしたので、官舎の皆さん共々相談の結果、自由行動を取ることに決定いたしました。が、まだ家が見つからぬまま官舎にいるうちに難民の中から流行し始めた伝染病が台風のように吹き荒れ始めました。誕生前の順子がハシカにかかり十日ほどの後に次男達也が、高熱にあえぎ、苦しむ二人のため、タオルでひたいをぬらすだけ、何にもないのです。

老頭児が、支那町に買い出しに行っても、充分なお金がないのです。給料はなく、デパートの収入、銀行、郵便局、全ての収入源は押えられてしまっており、苦しむ二人の子を助けたいと思っても、病院もなく、医者とは殆ど連行され不在、もちろん薬品等あるわけもなく、「本当に死を待つ覚悟を」と思っている時に当

時間東軍の軍医さんが、関東軍の各家庭に配られた「赤本」と云う自筆の医療書を県本部に置いてあったのをハッと思い出しました。すっかり忘れ果てておりました。「神の助け」と直感しました。「馬鈴薯と生姜とメリケン粉」でもその生姜がありません。懸命に探しとめた紅生姜の有難かったこと、私今でも紅生姜は口にいたしません。次の日老頭児が、牛肉を胸にはると良いと聞いて、どうして都合をつけたのでしょうか「テキ」にする肉を五枚買って来て、二人の胸に張ってくれるのです。その目からは、老人の悲しみと愛の涙が流れ出ておりました。そんな悲しみをよそに、順子は逝きました。生を受けて一年未滿の順子は逝ってしまいました。

いとし子よあら道こゆるよみのくに旅やすかれ  
とたゞいのるのみ ハハ

順子が兄を守ってくれたのだと思ってます。

達也は、老頭児の愛の牛肉と順子の魂によって高熱も下り順調に回復することが出来ましたが、長い間声が出ず、三十歳過ぎた頃でも、うん／＼と変な咳払

いをしておりました。順子の初七日を形ばかりに済ませ、以前より民会から正式に世界紅万字会の院長の助手として、難民孤児救済に尽くして貰えないかとの話がありましたので、順子の供養のためにもと心良くお受けすることになり、早速撫順滋済院長楊樹枝と書かれた大きな看板を眺め、感無量の想いで元、山楊樓の夢の色里の門をくぐりました。玄関には昔から主人の尊敬する楊先生が、二人の息子を抱きかかえるようにして迎えて下さいました。姑は、黒河の方から撫順の嫁の里の方へ逃げ帰っていた弟の所に迎えて貰いましたので、私は安心して孤児院の仕事が出来ることになりました。どこかで父さんが、「文子頑張ってるネ、えらいよ」と言ってるようです。

翌日から保母となる方を、民会のほうから連れて来て頂きました。十人ぐらいだったと思います。皆さん北鮮満から来た方でした。殆ど丸刈り頭のもも痛々しく、撫順に来てから、毛糸を頂きペレー坊を作りましたと、おっしゃっていました。孤児達を迎えるための準備は民会と満鉄側の方達ですて頂いておりました

が、それは孤児達を撫順各地の収容所から連れて来て頂くだけの仕事で、紅万字会の方は、衣・食・住の細々としたことまでしなければなりません。只、毛布、布団は万字会のほうで直ぐにも寝ることの出来るよう、その数に応じるといふ会長様からのお達しがございましたので、楊院長も山羊ひげを引っ張りながら童顔をほころばせて喜んでおられたのが懐かしく思われます。

さあ、明日からは、お貰いさんです、大きな麻袋を持って、各家庭に参ります。恥かしい気持を押しかくして、まず満鉄社宅の親友の家にまいりました。子供の衣類が一番有難く、「ふみちゃん頑張ってる」の声に送られて友達と別れてまいりましたが、それが別れでした。久し振りに会った親友とも、いつまでも名残りを惜しんでいる時間はありませんでした。色々欲しい物ばかりですが、取りあえず、寝具、衣類を集めることで懸命をお願いしてまいりました。紅万字の皆さん方は本当に親切にして頂きましたが、それに甘えているわけには参りませんでした。一人大きな

麻袋を肩にかついで雪中の行軍は、難事業でした。

でも着替え一枚ない孤児を思うと口惜しく、悲しくて、くじけまい／＼と思う後から涙がこぼれ、氷のしずくが口に流れ込みます。うじ／＼としているひまはありません、孤児達が来る日は、目の前です。紅万字会から送られて来たミシンに向かつて、保母さん達は衣類の直しです。とに角、手足が通り首が通れば、頂いたままの型で良いことにして、年令別に分けて二百着が目標です。

来ていただいた保母さんは皆素晴らしい方ばかり、何から何まで相談にのって頂いて十一月の始めには孤児を迎える準備が整いました。夜具、衣類、玩具までも揃いました。食糧は、高粱、粟、保母さんは「満腹に頂けるだけで幸せです」途中、餓死させた子供にも…と後は声も出ない方達ばかりの集まりでした。

「野島さん満人のおじいさんが面会です」アッ老頭児だと思えました。老頭児は長男の靴をしつかり抱きしめておりました。白系のブレーニン親子が二、三日前に大鼻子（ソ連兵）にトラックでシベリアに連れて

行かれたことを話し、ポロポロと涙を流し、自分もう一人も友達がないこと、家も取られたことを話しここへ置いて欲しいと泣きます。困りましたが院長に頼んで見ようとお話をいたしましたところが「うん」とうなずかれ、万字会で給金は出すからと言つて下さつて雑役夫の名目でその日から仕事を色々と教えて頂いて、皆大変重宝しておりました。

いよ／＼十一月二日、長男の誕生日でした。孤児達が来る日、何か因縁のようなものを感じました。朝九時一番目の収容所から十二人の孤児が送られてまいりました。バリカンを手にして待っていた私は、予想以上の汚なさに愕然としてしまいました。蜘蛛の巣という言葉、バリカンを握り締めました。蜘蛛の巣という言葉以上に髪の毛は地肌ねばりつき、その中を何百匹か何千匹とも云えるほどのシラミの巣でした。やせ細った首すじに喰いついているシラミを払うのも判らぬほど、何も感じなくなっているのです。可哀相で涙が次から次に流れ目にしみるのを左手で拭きながら、作業を終りました。丸坊主にした後は、次々に老頭児が用

意してくれた風呂呂に入れ、保母さん心尽くしの衣類に身を包み、生れ変わったような顔をして食事の膳につくや、かぶりついておりました。高粱の粥に大根、人参、じゃが芋の煮付け、好き嫌い等あの孤児達はあの時からきつと言わなくなったと思います。

ようやく一日が終わった後、孤児と一緒に部屋で寝起きをさせるようにしていた私は、子供達を呼んで、別室でこっそりと一日の話や、主人の思い出、面白い老頭鬼の話で、二人の子供の寂しさをまぎらわすことに努め、自らも慰めることに努めて来ました。保母さん達は、受持ちの各自の仕事が終り、部屋に帰るや、今度はシラミとの斗たたかいでした。孤児達のこのシラミにはこれからも続く收容がある限り続くであろうことを話しながら、皆にぎやかに笑いあいました。私は久しぶりに握ったバリカンに手がこわばり、落ちた足元の髪の毛からよじ登って来たシラミが肌に喰いついているのを、一匹ずつ引きちぎるようにして、もぎ取ったあの日々が、ウソのようでありながら、思わず身震いのするのを覚えます。が、今は懐かしく、子供達の姿

が思い出されるについても、あのソ連兵達の、憎い／＼侵入さえなければ、あの孤児達も、非道な目にあうこともなく済んだであろうと思う。

そつと部屋を抜け出して次男が私達の部屋に来て「母さんお腹すいた」「お家に帰ろうよ」「父さんが僕達を探してるよ」と涙ぐんで訴えるのが切なくてなりませんでした。

「想ひ出は遠く果てなく、吾亦紅の花に似て

儂おぼろきは吾亦紅ウレシイの紅クレナイの色か」

満州の秋の広野にゆらぐ寂しい可憐な吾亦紅を想い出しました。

十二月に入ると收容所からの孤児の姿もだんだんと少なくなり、それと入れ替り、民会の方は、難民の死体の收容と処理に大童おおわらわのありさまでした。難民の死体、栄養失調の行き倒れ、病人の收容と大変なありさまでしたが、その影に、紅万字の御協力がどれほどの力になったか、日本人々の中でどれほどの方達が知っておいででしょうか。「世界紅万字会」古くから中国において大きな勢力と権力を持った慈善団体で、中

国の中では財産家でなければ、入会出来ない、大きな組織だったのでございます。毎年正月の元旦に大きな祭りが行われ、その中で「占い」の行事で、その年の吉凶が解ると私の亡夫から聞かされておりました。ある年の元旦の占いにより、大正十二年の大震災が予知されており、多大の恩恵を受けたと言い伝えを聞かされております。(念のため、東京銀座四丁目日本紅万字会)が存在していることを存じております。話が横みちにそれてしまいました。

孤児院での落ち着いた生活のように思われる日々の中にも、悲しい苦しいこともたくさんありました。孤児達は避難中の栄養失調、寒風の中の避難行に、つかれ果てて撫順の安全地帯までたどり着き、縁あって私の所までたどりつきはしたものの、病魔には勝てず、やせおとろえて、臉をとじてしまうのでした。亡くなった孤児は保母の手から、民会の雑役夫に渡され、始末をされ、裏山に着のみのまま埋そうされました。悲しみはひとしおではあります、悲しんでいるひまはありませんでした。

今日も又みなしごは逝きぬ雪の日に

白き墓標の数を増しつ、

窓ごしに降り積む雪の白ささえ

悲しみさそう孤児院の夕べ

五十年の歳月を経た今日、若い日に詠んだ諸々の歌が脳裏をよぎって行きます。

院長の部屋からお呼びの鈴が鳴ります。急いで行くと、そこには通訳の日本人を連れたソ連兵が立っていました。「あなたが院長代理かね」「え、そうです、野島といいます」「貴方は」憎しみを込めた目が、向こうにも通じたのでしょうか、「林だ」と一言、言うと同じ時に、ソ連兵に向かって、早口で何か言いました。ソ連兵はいきなりピストルを私の背中につきつけました。通訳が、「歩け」「孤児の部屋を案内しろ」一生懸命たじろいでなるものかと必死に恐ろしさを我慢して歩きました。その時の恐ろしさ、いつピストルの引金を引かれるかと、心の中でまだかまだかと一歩ふみ出すごとに恐ろしさが増して来ます。後で考えるのが恐ろしく、なぜあんな恐ろしい目に会わされたのか、私

の憎しみの目が顔が、相手の感情をゆるがしたのかも判りません。

昭和二十一年の正月を皆で迎えた日、野島さんを見たと言われる方からの訪問を受けました。身体が震えておりました。「いつ、どこで、どうして」挨拶をしたのかどうか覚えておりませんでした。その方は、「野島さんを見たのはハルピン病院の、自分のベットの隣りにいた人でした。私が病院を出ることを話すと、野島さんは口早に撫順の住所と貴女の名を言われ、「是非元氣だと言つて貰えないか」と、頼まれましたので、「来」ずい分探しましたが、野島さんの顔を思い出すと、来ずにはいられませんでした。」と涙ぐんで泣いて下さいました。

それからすぐ、院長にお願いに行きました。親子三人死ぬ覚悟です。「ハルピン」に老頭児を連れて行きますとお願いしますと、私の性格を御存知の院長は「よろしい、が子供を連れて行くことは許さない」と言われました。「子供は日本の宝、それに子供途中で日本語しやるよ」と笑顔で、うなづきながらおっしゃい

ました。二人の子供を置いて、老頭児と裏口から出る時は、もう子供達にも、院の孤児達にも、保母さんにも会えぬ覚悟でございました。

苦難を覚悟の旅でしたが、苦難を覚悟等という生やさしいものではありませんでした。口を開けて物を言うことが出来ません。周囲は皆敵です。朝、昼、夜の食事も、食べたか食べないか、ろくな物は口に出来ませんでした。一番困ったのは用足しでした。恥かしがっては怪しまれます、悪夢のような一週間の旅でした。主人に会えるの一心でハルピン駅に辿り着きました。老頭児が、何人かの人をつかまえ、尋ねてようやく着いた所は、もう、旧日本陸軍の病舎ではありませんでした。泣くにも泣けず私は雪の氷りついた道ばたに座り込んでしまいました。精も根も尽き果てた私を、自分の家まで運んで下さった方は、ハルピンの町はずれで満人相手の漢方薬屋さんで、かたわら医者のような方らしいと思われました。三日間、松の実を入れた米の粥で私を助けて下さいました。今だに忘れ得ぬ中国人の中のお一人でございます。家を出て十日余りにな

ります。老頭児がしきりに、雄ちゃんが寂しいよと言  
う言葉に、言い返す言葉もなく、「帰ろう」と、決心  
をして、張さんと言われたその方に些少ではありまし  
たが、御礼をいたしました。張さんはその私にこう言  
われました。「日本負けました。これからは日本人の  
思う通りにいきませんよ」訓すように馴れた日本語で  
言われた私は、冷水をざんぶり掛けられた思いでした。  
老頭児にさんさん苦勞をかけ、孤児院に辿りついたの  
は半月も過ぎておりました。院長始め孤児達、皆々手  
をたたいて喜んでくれました。院長は、しっかりと私  
の手を握り締めて、「良く帰った。無事でよかった」  
と涙ぐみながら無事の帰院を喜んで下さいました。「小  
母ちゃん僕達ネ雄ちゃんと一緒に老子様をお願いをし  
たよ」と幼い顔で見上げられた時は泣きだしてしま  
いました。遠い／＼昔が交錯して夢のようです。

昭和二十一年四月の終り、院長の部屋から呼び鈴が  
なり、急ぎ参りましたところ、一通の紙を渡されまし  
た。それは心の奥で待っていた、帰国命令でした。で  
もハッと気づいたのは、院長の悲しげな顔でした。そ

のお顔を見て慌てました。「日本は敗戦国になった。  
日本に帰ってどうするのか」「孤児達可哀相、ポツダ  
ム宣言知ってますか」「百カ条あるよ／＼」と言われ  
ました。「皆と良く相談して決めます」とそう／＼に  
引揚げて部屋にもどり、相談をいたしました。矢張  
り皆想いは同じ、「主人が先に帰っているのでは」と  
言うことで院長には済まないが一応帰国の上で又帰っ  
て来たい人は帰ったら等と、何も知らず呑気なことを  
考えていました。二、三日後の朝のお務めの後、院長  
の手招きで行きますと、「部屋に來なさい」と言われ  
行つて見ますと手に持った掛軸を差し出されました。  
部屋で開けて見ると、院長の達筆の揮毫でした。

「道實實行又貴乎中不中

不行不行不中」

「荷物になるが、私の遺品だ」と言われた揮毫品です。

お別れの日院長は、「野島先生再見」十年経つたら  
必らず日本に行くよと言われましたがもう五十年の歳  
月は流れ去りました。その時院長は丁度五十歳でござ  
いました。許された衣類、順子の遺骨を胸に孤児、保

母、雑役の満鉄青年隊十五人、合計二百人近い私達は、老祖様の前に祈りを終え、院長に感謝を込めて、別れがたい別れをして、後を振り返り／＼撫順駅向けて出発いたしました。駅に着いた所、今まで見たこともない撫順駅でしたが、それは吉林駅を通過する荷物輸送用の鉄道との話でした。

私達が着いて見たものは、天井のない無蓋車が五両並んでおりました。それがコロ島までの車でした。何時間か待たされた末、皆で相談した上で青年隊長に頼み談判をして貰った結果は、「金を出せ」でした。皆で少しづつ出し合つてと言つてもお金を持っているのは私と青年達が満鉄から頂いた涙金です。出すわけには行かないと言えば、汽車は立往生です。こんな交渉は初めて、「え、何とかなるわ」と自分の心細い財布から朝銀金を十枚、百円渡すとニコ／＼顔で去って行き、カラン／＼と汽笛代りの鈴を鳴らして無蓋車は動き出しましたが、そのおそいこと、次々と駅に止まつては、引揚げる日本人を拾つて乗せては現金を要求。品物は略奪同様に取り上げられてコロ島についたのは

何日目だったのか、皆生きた心地はいたしませんでした。でもコロ島に着いたということが嬉しくてなりませんでした。子供達に「父さんがきつと先に帰つて待つていてくれるわよ。」順番待ちの乗船は大変でした。でも孤児連れと云うことで案外早く順番が来て、コロ島には一晩泊つたきりでした。白い大きな帆を張つた日本郵船学校の日本丸の姿が、目の前に見える埠頭に立つた時は思わず皆の口から喚声があがり、万歳／＼の声で賑わいました。

真白な船体の優雅さ、乗組員の練習生の真白い制服姿の美しさに、目を見開きました。ポロ着物にすけた顔、小さな骨箱を抱え、古びた袋にランドセルを背負つた、皆一様の姿がぞろ／＼と甲板を歩いて来る姿に、若いりりしい生徒さんは、手で目をこすり、敬礼のままに迎えて下さいました。船では孤児達に初めて見る日本を、垢のついた顔では、米兵に笑われるよと風呂に入れて貰いました。

夜、船を見舞つて下すつた船長さんに、「オッ、美男美女のお揃いだな」「これからは日本本土に帰つて



来て皆さん一人一人で頑張らねばならぬと思う、しっかり強く立派な人間になるように私は祈ってますよ」それから練習生の皆さんがプレゼントに「今日日本で流行のリングの歌を教えますから覚えて行って下さい」と、あの歌を何度も／＼歌って下さったのが心の奥にいつまでも残っております。孤児達はくり返し教えて頂いた歌を直ぐに覚えての大合唱に、今までの苦しみも、忘れてしまったかのように輝いてみえました。

昭和二十一年六月七日甲板の上からみた博多港は、大連の埠頭の大きさは、くらべものにならぬほどの質素な小さな埠頭だと思いながら陸地の方へ上つて来ますと、大きな兵隊が、手に持った「びん」から白い粉をシュッと吹きつけて、頭の前から足下まで振りかけておりました。あれでシラミがいなくなると聞いて、我慢をしたことがおかしいようです。DDTという名を知ったのです。それが終り部屋に入ると、子供達の姿はなく三人の保母と私達親子と、奉天からの人達でした。事務室に行き尋ねますと、孤児は県の福祉の方が連れて藤崎の松風園に入れますから、貴方達は、収

容所で別行動をとります。これが内地かと落胆の始まりとなりました。でも日曜日には松風園に行けば面会出来ますと言われ、母の家に落着いた後、筑紫郡山家村から福岡市の藤崎にある松風園まで、トーマロコシのボン／＼菓子の麻袋を肩にかついで日曜毎に顔を見に行くのが楽しみでした。

帰って来ると感ちがいをしていた主人も姿を見せてはくれませんでした。孤児達は野島の小母ちゃんを覚えていてくれるでしょうか。長男五十三歳、次男五十一歳になりましたが父さんはとう／＼帰って来てはくれませんでした。昭和も終って早や平成四年となりました。

#### 執筆者の横顔

大正七年生れのふみ子氏は、満州国の撫順で祖母のもとで育てられ、幼稚園から高小、撫順高女を卒業し、当時華やかな炭鉱都市ですくすくと長じた。

某日、市主催の講演会で「協和会」の話を聴いた。「満州国をつくった人々は学閥はない、軍閥もない、勿論財閥もない、只、あるものは東洋精神の王道があ

った、王道とは日本で皇道、インドでは佛道、西欧ではキリスト教と言う、政府は軍の下位についてはいけない、協和会は政府の下についてはいけない、上意下達<sup>が</sup>成功せんとするならば、下意上達<sup>あつて</sup>こそである。」ふみ子氏は関心深くして聴いた、その時の講師が、「野鳥達雄協和会副参事であった。このようなことは忘れていた昭和九年に協和会撫順県本部事務長の野鳥氏に見初められ、また祖母のすすめに従つて野鳥達雄氏と結婚した。

新婚夫婦は二人とも学究的な理性派であつた。お互いに尊敬しあいながら、満州建国の本質論など愛妻家の野鳥氏は、わかり易くふみ子氏に聴かせていた。

ふみ子氏は主人野鳥氏を尊敬しながら、県本部の日、満、鮮系職員には惜しげもなく与え面倒な世話をされたから、若い賢夫人としてあがめられていた。正に良妻型である。

しかるに結婚して十年目、昭和十八年、野鳥氏召集され日本軍人として入営した。

翌、十九年から二十年に入るや戦局は一変しつつかあ

る中、八月八日突如、日ソ不可侵条約を一方的に打破り、越境して日本人に悪逆無道の拳に出たとの報道に撫順市内外も大きく動揺した。

八月十四日正午のラジオで蒋介石総統から「日本人の生命財産は守ります」という意味の言葉が流れたものの、撫順市内は暴徒の群れがソ連兵を先頭に立てて、ドラの鐘を打ちならして、なだれこんできて日本人の家の中に入りこみ、長い棒で窓ガラスを叩き割り、天井、壁といわず胃をはがしてもつてゆく、家財道具一切もち逃げされた。天井裏に逃げこんでのぞきみしたふみ子氏は、そのすさまじさ、恐ろしさ、筆舌につくせないと言っている。

八月二十一日、野鳥氏と一緒にいた兵が来られて、僕と野鳥はハルピン陸軍病院にいたとのこと、知らせを感謝して、直ちに使用人の老頭兎を連れて案内にたてて鉄道でハルピンに着いて探しまわつたが見あたらず悲憤の涙を流して撫順に戻り世の無情に泣いた。

生きるため、楊孤児院長を訪ね、孤児の世話や指導の仕事をお願いしたところ、快く楊院長は採用してくれた

ので一生懸命働いていたが、二十一年四月、引揚げ命令に接した。院長は止むを得ないといい、「道貴実行又貴乎中不行不行不中」の揮毫した掛軸をふみ子氏に渡しながら悲しげな顔をされた楊院長が深く深く印象にのこったと語るふみ子さんの涙声をきく、彼女の人徳ここにある。

引揚げて、もしやふみ子女史より早く復員しているかと思つたが、愛する主人は帰らず、昭和は過ぎて、平成四年を迎えた。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## 満州での逃避行（子どもの霊に捧ぐ）

北海道 中村 久尚

私は昭和十五年十一月に、甲府第四十九連隊を除隊と同時に、満州への農工開拓移民に応募し合格したの

で、翌十六年、妻を娶り同年十二月十四日と記憶しているが、確か大東亜戦争の始まった直後だった。

全国各地より集まった人達と満州牡丹江省東寧河沿第十五野戦兵器廠に軍属として、勤務を命ぜられ農地二町歩を与えられた。

この農耕については満人農家に委託し、収穫物は部隊で買い入れてくれることで河沿地区に入地した。

我々の部落は十戸・三十人ほどの小さな部落だが、誠に平和な静かな日々を送っていた。昭和二十年八月八日だったか、いつもの通りの出勤で営門をくぐった八時ちよつと前だった、突然、ソ連の飛行機の襲来と機銃掃射とで、上を下への大混乱となった。

既に幾人もの負傷者は出る、その中を兵舎に入るや上官命令により、家族のある軍人軍属は直ちに家に帰り、戦軍軍装になり、家族は一步たりとも外に出さぬよう戸締めして、一時間以内に隊に集合せよとのことだった。これは出勤ではなく、戦時出勤だった。

家族にはこの次第をよく言い聞かせて帰隊し、上官の命令下に入ったが、数時間後、又命令が出て、家